



## 天野喜孝による天野喜孝の世界 少年と少女のプラトニックな エロティシズム



アーティスト天野喜孝が、最初の画アニメ作品となる『Fantascope ~tylosoma~』を上梓した後、いや、完成前から並行してとりかかっていたのが、本作『鳥の歌』だ。

これまで数多くのキャラクターデザインやコンセプトデザインを手掛けてきた天野だが、本作は自らのアイデアから始めて、作画、映像制作のほとんどを天野の想像力の赴くままに築いている。そこには創作上の制約は何もなかった。

「はじめに言葉があった」と旧約聖書は語る。だが画家である天野にとって、はじめにあったのはあくまでもイメージだった。

ボーイミーツ・ガール——時が止まったかのような四畳半の部屋で、少年は少女に出会った。

たったそれだけのイメージから天野は絵を描き、その絵からまた次のイメージが生まれ、そうしていつしか物語が生まれた。

「ファンタジー」＝「剣と魔法の西洋風お伽噺」を主戦場にしてきた天野作品では、あまり観ることのなかった和の世界、しかも現代日本の物語が展開するのが本作である。

主人公の少年が、作者の分身であることは否定しがたい。52年生まれの天野喜孝にとって、少年の目に映る60年代の風景は見慣れたものだった。だが、ここで天野は安易に資料に頼ることを自分に戒めた——記憶の中の風景は、少年の脳に刻まれた印象だ。大人になってから同じ風景を見ても、当時の印象を取り戻すことはできない。



どこか懐かしい日本でありながら、マニエリスティックな違和感を残す本作の街は、そうした、過去や記憶の対象化の末に生まれたイメージだ。実在の公園や路地を描きながら、非現実を感じさせる手廻りは、天野喜孝という幻想作家の必要条件のだろう。

記録ではなく記憶の中の街を描く作家の視線は、そのまま主人公の男＝「少年の成長した姿」に重なってくる。子供のときに会った少女を忘れることができず、さまよい続ける男は、芸術の女神の微笑みを求めて作品を作り続ける天野自身の姿なのかもしれない。そう言えば前作『Fantascope ~tylosoma~』もまた、女神を探して彷徨する男の物語だった。自らを罰する男とそれを赦す女というモチーフは、天野喜孝のライフテーマなのだろうか。

作中の少年にとって少女とは何だったのか？ 初恋の存在であり、年上のお姉さんであり、理想

の女性だったのか。ここで再び天野の発言を引用すれば「少女は父親を殺したが、少年は母親を殺せなかった」のだ。つまり、少年＝男は少女＝女に永遠に敵わない——赦しを求めることしかできないのだ。

だが少女は決して男を翻弄する娼婦ではない。60年代のフォークグループPeter, Paul & Maryの曲『パフ』を想い起こしてほしい。少年ジャッキーは童のバフと出会い楽しい日々を過ごす、やがて大人になりいつかバフを忘れる。しかしバフはずっと少年の訪れを待っていたのだ。いつの日か少年が彼女を思い出すそのときまで。

本作で、少年の成れの果てとして登場するくたびれた男は、自分の人生から逃げるかのように少年の日の記憶に舞い戻っていく。それが現実か否かはたいした問題ではない。なぜなら結局、私達の見る世界は、私達の心の反映でしかないのだから。男は幸せになった——そう思いたい。